

映像による奈良イメージの流通と構築の現状 についての文化人類学的研究

An Anthropological Study on the Circulation and Construction of Image
through the Visual: The Case of Nara

松川 恭子*

Kyoko Matsukawa

I はじめに

奈良の表象について、小川伸彦 [2006] は、表現形態（メディア）別に文字テキスト、図像／画像／映像／音楽の4種類に分けている。奈良に関する詩歌、文章を全て含む文字テキストは古代から現在に至るまで膨大な量があり、研究の蓄積も十分にあるということだ¹⁾。本研究では、表象の中でもヴィジュアル（＝可視的）なものを中心に考察を行った。具体的には、動画としての映像作品を収集し、奈良の表象の傾向を探った²⁾。その作業と並行して、映像に先立ち、実在をそのまま写し取ることを可能とし、新たな視覚体験をもたらした写真に注目した [西村 1997: 6-7]。写真という19世紀に発明された「複製技術」 [ベンヤミン 1991] が奈良の表象の仕方にとどのような影響を与えたのかという点と、今日の表象につながる傾向があるかどうかという点の二つを確認したかったからである。なお、写真については、写真そのものを扱う準備作業として、撮影する主体である写真家たちの経歴に焦点を当てて調査を行った。

本研究を通じて明らかになった点を最初にまとめると、以下の2点になる。(1) 視覚に忠実な写真技術の導入により、奈良の寺社・仏像の「本質」が写し取られ、文化財というカテゴリーが生まれるのに貢献した。明治～戦前の写真家たちは国家事業を遂行する中で、美術関係の研究者と交流し、雑誌に掲載された文化財写真を通じて奈良イメージが構築されていった。(2) 1980年代以降に奈良を題材にした映像作品が消費者の間で流通するようになった。映像作品のテーマには、寺社、文化財を扱ったものが多く、明治以来の奈良イメージが映像作品を通じて現在も流通している。

II 奈良関連の写真：文化財写真の系譜とその流通の現在

写真は、19世紀前半にフランスのニエプス、ダゲール、イギリスのタルボットなどが個別に研

究する中で発明された。レンズを中心とする光学機器と感光材料の発達がその背後にある〔バジャック 2003〕。ヨーロッパ全土に爆発的に広がった写真術は、幕末には日本で受容されるに至った。日本初の写真機はダゲレオタイプのもので、1848年にオランダ船で長崎に持ち込まれた。日本人による写真の中で現存する最も古い写真は、1857年に薩摩藩の市来四郎らによって撮影された島津斉彬の銀板写真（ダゲレオタイプ）である。黒船来航後、1854年に日米和親条約が、1858年には日米修好通商条約が結ばれた。特に横浜には1859年の開港後に外国人が多く居留し、横浜の風景を写した「横浜写真」が数多く流通した〔三木 2007〕。

奈良が写真撮影の対象となるのは、時代が明治になってからだ。現在も博物館の図録や仏像写真の形で流通する写真の系譜を「文化財写真の系譜」と呼ぶことができる³⁾。以下に挙げる写真師たちが、当時の国家による文化財政策の実施に関わる形で文化財写真を撮影した。

横山松三郎（1838～1884）⁴⁾

横山松三郎は、1838（天保9）年に択捉島で生まれた。祖父の代から高田屋嘉兵衛に仕えていたが、嘉兵衛を継いだ弟の金兵衛がロシア船との密約の疑いで財産を没収されたため、横山家は函館に移った。横山は、函館でレーマンという名の画家を手伝ううちに、写真術を学ぶことを決意する。1862年に幕船健順丸に乗船し、上海まで赴いた。函館に戻ったのち、写真を好んだロシア領事ゴスケヴィッチの所に出入りするようになった。1865（慶応元）年には、横浜に写真館を開業していた下岡蓮杖の門下生となった。1868（慶応4）年には独立し、写真館を開業した。両国からすぐに上野・池之端に移った。写真館の名前は「通天楼」だった。

横山の名声を高めたのは、1871（明治4）年に旧江戸城内を撮影した写真を収めたアルバム『旧江戸城写真帖』制作である。この事業を発案した制度調査御用掛の蟻川式胤の指示で、横山は廃仏毀釈の被害を受けた全国の名刹を撮影し始めた。博物館が設置され、古器旧物保存の太政官布告の発令がなされた1872（明治5）年には、町田久成を中心とした「壬申検査」と呼ばれる古美術調査の一環で、正倉院御物の写真撮影を行った。

小川一眞（1860～1929）⁵⁾

小川一眞は、1860（万延元）年に忍藩（現在の埼玉県行田市）に生まれた。1882（明治15）年にアメリカに渡り、写真印刷術や写真乾板製造法を2年にわたって学んだ。帰国後の1885（明治18）年に写真館「玉潤館」を東京麹町に開設した。

小川が玉潤館を開いた頃、美術行政確立のための古社寺調査が九鬼隆一や岡倉覚三（天心）によって始められていた。小川は、1888（明治21）年5月から翌年2月にかけて実施された「近畿宝物調査」に同行し、写真撮影を行った。この調査は、宮内省、内務省、文部省の3省の協力で実施され、東洋美術、文献的歴史研究の専門家が同行した。横山松三郎が同行して写真を撮影した壬申検査と比較すると、組織的に行われた本格的な調査だった。

小川は、日本で初めてのコロタイプ写真製版印刷を開始するとともに、当時の日本では普及していなかった乾板を使用した⁶⁾。法隆寺の釈迦三尊像、秋篠寺の救脱菩薩像などが小川の手によって撮影された。その後、岡倉天心（東京美術学校校長）と高橋健三（内閣官報局長）経営による

国華社から1889（明治22）年に刊行された木版多色刷り図版を用いた美術雑誌『国華』には、小川が撮影した興福寺の無着像が掲載された。更に小川の写真は、1899（明治32）～1908（明治41）年に刊行された『真美大観』（仏像、仏画が多数掲載された美術全集）に多数掲載された。彼は、『国華』と同様、写真図版制作を担当した。小川の写真の流通は、日本国内に留まらず、1900（明治33）年のパリ万博に出品された日本美術史本『Histoire de l' Art du Japon』にも使用された。岡塚 [2006:28] が述べるように、小川が近畿宝物調査で撮影した写真は、岡倉天心などの研究者のテキストと組み合わせられることで、奈良の文化財を日本美術史の中に位置づけるのに貢献したといえる。

工藤利三郎（1839～1929）⁷¹

前述の横山松三郎・小川一眞が、奈良を外から訪れて文化財の写真撮影を行ったのに対し、工藤利三郎と後述する小川晴暘は、奈良に居住して古美術を撮影した。

工藤は、1848（嘉永元）年、現在の徳島市川内町富久新田の農家に、長男として生まれた。13歳で上京し、写真術を学んだ後、故郷の徳島に戻って写真館を開業した。1893（明治26）年に徳島の写真館を閉じて奈良に移り住んだ。奈良市猿沢池東畔に仏教美術専門の「工藤写真館」（後に工藤精華堂）に改称）を開いた。後に法隆寺住職となった佐伯定胤師と知り合って興福寺西金堂の仏像撮影を許可されたのを皮切りに、東大寺、法隆寺など、奈良の仏像、堂塔を撮影していった。奈良だけではなく、全国の文化財を撮影し、1908（明治41）～1926（大正15）年にわたって写真集『日本精華』を刊行した。小川一眞のように国の手による大がかりな文化財調査には参加しなかったが、奈良の地から仏教美術の視覚化に貢献した人物であるといえる。

小川晴暘（1894～1960）⁸¹

小川晴暘は、兵庫県姫路市に生まれた。東京の丸木写真館で写真術を学んだ後、画家を志すものの、専属写真家として朝日新聞社に入社した。奈良に移り住んだのち、仏像の撮影を始めるようになる。1922（大正11）年に美術史家・歌人である会津八一の勧めで朝日新聞社を辞し、仏像などの文化財撮影を専門とする飛鳥園を開業した。小川は、文化財の写真撮影と平行して、雑誌『仏教美術』（後に『東洋美術』と改称）を発行した。雑誌には、日本美術史の源豊宗、東洋史の内藤湖南、考古学の浜田青陵、建築史の関野貞など、各分野における一級の研究者が寄稿した。小川自身も研究者との交際を重ねる中で仏像写真に対する理解を深めていった。

以上、主に幕末～戦前にかけて文化財写真撮影に関わった写真家たちの履歴と人間関係について説明した。簡単な検討ではあったが、写真と写真を撮影する写真師が国民国家成立プロセスの中で「文化財」と「日本美術史」成立に重要な役割を果たしたことがわかる。廃仏毀釈の動きの中、大きな損害を受けていた奈良の寺社・仏像は、文化財行政が確立していく中で、日本の原点としてのイメージを獲得するに至った。

この日本の原点としての奈良を表象する文化財写真（特に仏像写真）がより広く普及していくのに寄与したのは、和辻哲郎の『古寺巡礼』（岩波書店）である [川瀬 2006b:29]。戦後には、入

江泰吉や土門拳の仏像写真が文化財＝奈良のイメージをさらに強めたと考えられる。

写真は、撮影する写真師がいなければ存在しない。ただし、写真の流通のためには印刷や展示を行う主体の存在も重要である。奈良関連の写真を展示、発信する場所として現在挙げられるのは、上述した小川晴暘が1922（大正11）年に開業した飛鳥園（現在は、株式会社化され、三男の小川光三が代表となっている）と入江泰吉や工藤利三郎の作品を所蔵する奈良市写真美術館である。飛鳥園では、仏像写真のリプリントとともにポストカードを数多く販売している。奈良市写真美術館では、定期的に入江や入江の弟子にあたる写真家の展覧会を開催している。この二つの機関の成立過程は、明治以来に形作られてきた文化財・美術史の系統に連なっていると考えられる。

今回の研究で十分に明らかにできなかったのは、「モノ」としての写真の特性が奈良イメージの流通と構築に果たした役割についてである。クリストファー・ピニーは、インドにおける写真が社会的文脈の中で流通しているさまを『カメラ・インディカーインド写真の社会生活』において描きだしている [Pinney 1997]。インドでも奈良の文化財への視線と同様、英国による植民地支配において、写真は当初、被支配者の本質を写し取り、分類するために用いられた。その一方で、インド人自身が自己の記憶や快楽を表現する技法を写真家が取り入れ、写真として具現化するとともに、その写真を個人はアルバムの形にまとめていった。

奈良のイメージ構築における社会関係について更に考察を進めていくためには、文化財写真の分野に限らず、写真館、アマチュア写真家、個人の写真収集に目配りする必要がある。アマチュア写真家の写真については、奈良県広報広聴課が、ウェブ上で大和路関係写真を募集し、ホームページ上で公開している。さらに、その写真は東京の奈良県代官山iスタジオの「まほろば写真展」で展示される。アマチュア写真家が写真技術について覚えた経路、写真公開を可能にする制度などが分析の視野に入ってくる。

Ⅲ 奈良関連の映像

奈良関連の映像は、どの程度流通しているのだろうか。その手がかりを得るために、国会図書館 NDL-OPACによって映像資料の検索と分類を行った。音楽録音資料・映像資料に関して「奈良」のキーワードで全文検索を行った。その後、映像資料のみを抽出し、詳細を確認したところ、1987～2007年にわたって以下のように35タイトルを得ることができた。詳細は以下のとおりである。それ以外にも、奈良を舞台にした映画・ドラマの情報収集を行った。

奈良関係映像資料（国立国会図書館NDL-OPACより「奈良」で検索）

	タイトル	発行者	発行年	形態	備考
1	奈良幻想：春の祭典・お水取り	東芝EMI	1987	ビデオディスク	
2	奈良：四季	日本コロムビア	1992	ビデオディスク	
3	音と映像による日本の音風景 100選。14 兵庫県・奈良県・和歌山県・岡山県	日本ビクター	1997	ビデオカセット	春日野の鹿と諸寺の鐘 (奈良県/奈良市を収録)

松川：映像による奈良イメージの流通と構築の現状についての文化人類学的研究

4	古都奈良の文化財	奈良市	1999	ビデオカセット	
5	運転室展望 関西本線（奈良～亀山）	テイチク/インベリアルレコード	2000	ビデオディスク	
6	除夜の鐘（4）～近畿編	NHKソフトウェア	2000	ビデオカセット	薬師寺/東大寺/長谷寺/新薬師寺/唐招提寺/法隆寺を収録
7	日本映像の20世紀. v.32 奈良県	NHKソフトウェア	2000	ビデオカセット	
8	世界遺産（43）古都奈良の文化財 1・2	ソニー・ミュージック/SME・ビジュアルワークス、TBSビデオ	2001	ビデオカセット	
9	日本の國寶至寶 時代を物語る 未来への遺産	NHKソフトウェア	2001	ビデオカセット	第2巻 寺と仏のはじまり 法隆寺・西院伽藍、第3巻 祈りの造形 法隆寺・太子ゆかりの寺々、第4巻 西城の香り 薬師寺、第5巻 天平の幕開け 東大寺・法華堂、第6巻 天平の華 東大寺・大仏開眼、第7巻 天平の薨 唐招提寺、第8巻 南都鹿鳴 青丹よし奈良の寺々、第19巻 南都復興 運慶・快慶
10	運転室展望ビデオ JR奈良線&桜井線（京都～奈良/奈良～王寺）	テイチク/インベリアルレコード	2002	DVD	
11	大人の旅物語「奈良」	ポニーキャニオン/小学館	2002	DVD	収録内容:猿沢池/町屋造り「ならまち格子の家」/重要文化財の書院造り「今西家書院」/奈良一刀彫り工房「大林社壽園」/山野辺の道の万葉歌碑群/檜原神社 他
12	TV見仏記2 滋賀/奈良編	ジェネオン・エンタテインメント/Project-T	2002	DVD	収録内容:三井寺/法明院/西教寺/椋野寺/元興寺/大安寺/法輪寺 出演:みうらじゅん/いとうせいこう
13	ふるさとの祭りと芸能. 第11巻 秋に舞う、第22巻 組（集団）の四季	NHKソフトウェア	2002	ビデオカセット	各巻に翁舞（奈良県奈良阪町）と宮座（奈良県奈良阪町）を収録
14	いにしへの奈良平城京の姿が見える 一三〇〇年の時をこえて	奈良県企画部平城遷都1300年記念事業準備室	2003	ビデオカセット	

総合研究所所報

15	音風景 奈良を奏でる	奈良県広報広聴課 企画	2003	ビデオカセット	
16	関西の通勤電車	ビコム	2003	DVD	関西本線-221系『大和路 快速』加茂-天王寺間,221 系『区間快速』天王寺-JR 難波間,奈良線/片町線/桜 井線を収録
17	日本の森 森の中の小さな旅. 6	ピーディアイ	2003	DVD	大台ヶ原の森 (奈良県) を収録
18	五木寛之の百寺巡礼. 第1巻 奈良・北陸 其の1~其の3	講談社	2004	DVD	
19	太田和彦のニッポン居酒屋紀行 .2 中日本篇 北信越・東海・近 畿	ジャパンイメー ジ コミュニケーション ズ	2004	DVD	
20	日本の美 桜. 西日本編	コロムビアミュー ジックエンタテイン メント	2004	DVD	長谷寺 (奈良県桜井市)、 室生寺 (奈良県室生村)、 吉野山 (奈良県吉野町)、 大野寺 (奈良県室生村) を収録
21	まぼろしの色彩を追って: 奈良 新薬師寺十二神将: 天平のバザ ラに会いたい	トランスアート	2004	DVD	
22	さくらnostalgia	ポニーキャニオン	2005	DVD	飛鳥の桜-石舞台古墳 (奈 良)、仏隆寺の桜-仏隆寺 (奈良)、大和寺の桜-長 谷寺・室生寺・吉野水分 神社 (奈良) を収録
23	調査・体験からはじめる歴史学 習: 日本を変えた人物を中心に : 文部科学省学習指導要領準拠 2 奈良時代・平安時代の新しい 学び方と調べ方	TDKコア	2005	ビデオカセット	奈良時代・平安時代の新 しい学び方と調べ方とし て、大仏の大きさ体験を 収録
24	大和路・悠々散歩: 古都奈良に 十三佛を訪ねて. 1~4	スバック	2005	DVD	
25	中西進の万葉こゝろ旅. シリー ズ1~4	奈良テレビ放送	2005 ~ 2006	DVD	
26	紅葉	NHKサービスセン ター	2006	DVD	奈良 (宝生寺,長谷寺)-11 月の星 (桑山哲也) を収 録
27	桜	NHKサービスセン ター	2006	DVD	桜の京 (さくらのみやこ) (奈良・吉野山)-遠い声 (溝口肇) を収録
28	桜紀行: 名所を巡る桜前線の旅		2006	DVD	吉野山、知足院の奈良八 重桜を収録

29	第47回近畿・東海・北陸ブロック民俗芸能大会	第47回近畿・東海・北陸ブロック民俗芸能大会実行委員会	2006	DVD	奈良豆比古神社の翁舞（奈良県）を収録
30	落語笑笑散歩. 第6巻 お伊勢まいり・喜六清八珍道中	Sony Music Direct (Japan)	2006	DVD	「奈良」を収録
31	TV見仏記. 10 奈良/京都・宇治編	カルチュア・パブリシヤーズ	2007	DVD	
32	桜井線：奈良～高田～王寺～JR難波	ビコム	2007	DVD	
33	桜井線&奈良線みやこ路快速：高田～奈良・奈良～京都	テイチクエンタテインメント	2007	DVD	
34	桜爛漫：Spring in Japan	NHKサービスセンター	2007	DVD	吉野（奈良）-Bright Day (S.E.N.S.) を収録
35	奈良のシカやん	松竹芸能	2007	DVD	松竹新喜劇・藤山寛美新十八番箱

映像作品には、寺社・文化財関係が多い。鉄道関係の映像作品が数多く流通していたことは、注目に値する。また、上記の表には載せていないが、東大時・薬師寺での音楽コンサートの記録DVDが販売されている点は、興味深い。ゴダイゴが東大寺で行ったコンサート、徳永英明が薬師寺で行ったコンサートの2点があった。他にも東大寺では谷村新二が、薬師寺では石井竜也がコンサートを行っている。寺=文化財ではないイメージ形成が進んでいるということがわかった。

Ⅳ おわりに

本研究では、社会に埋め込まれた個人によるイメージの利用までは十分に踏み込むことができていない。ただ、上記に挙げた仏像写真、文化財写真とは違う系統での個人の努力の一例に、アマチュア映像作家として奈良県内の伝統産業を昭和40年代から記録してきた秦峰一氏（大和郡山映像クラブ）の業績がある。

最後に、これからの展望について一言述べておきたい。現在、我々が生きるのは、「ヴィジュアル（視覚的）」イメージが氾濫する世界である。写真と映像という複製技術によって特色づけられる20世紀を経て、デジタル・データがウェブ空間で飛び交う21世紀に至り、我々が空間を知覚する際に参照するヴィジュアル・イメージの総量は飛躍的に増えている。量だけではなく、近年のウェブ空間では、複数メディアを組み合わせた情報提供が可能である。

たとえば、Googleマップの地図上に個人がデジタル写真を投稿することが可能なPanoramioというサイトが実際に運用されている。Googleマップでは、地図と航空写真の切り替えが可能である。このサイトにおける仕掛けは、航空写真という空の上からの「まなざし」と地上で実際にデジタルカメラによって撮影を行った個々人の「まなざし」の交差と言えらる⁹⁾。

Panoramioから投稿された写真を眺めると、確かに撮影者が観光客として撮ったであろう写真

が多いものの、日常的にふと目にするような写真の中には含まれている。報告者の経験から考えると、ウェブ上の地図利用は、非日常的な観光目的にかぎらない。日常的に場所の確認を行う上で地図を確認することも多いだろう¹⁰⁾。上空と地上の交差のみならず、複数の「まなざし」の交差がウェブ空間で可能になっている。

遠藤英樹は、ウェブ空間における多様な語りがデータ・アーカイブなどの形で収集・検索・リンクされるテキストのあり方を「ハイパーテキスト」という語を使うことで分析している〔遠藤 2006:48-50〕。ヴィジュアル・イメージが収集・検索・リンクされる様を「ハイパー・ヴィジュアル」と呼ぶことができるかもしれない。

このように技術が発達し、メディアの組み合わせが複雑になれば、我々の空間や場所に対する認識がさらに複雑になるかといえば、そうでもないようだ。上述したPanoramioで「奈良」「日本」と検索語を打ち込むと、JR奈良駅、近鉄奈良駅付近を中心とした地図が現れる。地図上には、1325点の写真が現れる。人気写真（つまり、閲覧回数が多い写真）だけでも613点ある（2008年9月3日現在）。ただ、点数が多い割には、撮影対象は限られている。人気写真の中で圧倒的に多いのは、東大寺、興福寺、春日大社、唐招提寺などの寺社、東大寺の大仏をはじめとする仏像、奈良公園の鹿である。ハイパー・ヴィジュアルによって相互参照度が高まったとしても、イメージは特定の事物を中心に流通し構成されているようである。なぜ、イメージの構築は、無限に拡散していかず、一定の対象に収斂していくのか。歴史的経緯を含め、奈良に関係したヴィジュアルな表象が流通するのを可能にする制度・社会的諸力についてさらに検討を行っていく必要がある。

注

- 1) 近代文学について一つ挙げると、〔浅田・和田 2001〕がある。
- 2) 観光における奈良イメージについては、〔遠藤 2001〕を参照。
- 3) 「文化財写真」の語には、文化財を対象とした写真と文化財としての写真という二つの意味が含まれるが、本報告では前者を意味する〔川瀬 2006a; 2006b〕。
- 4) 横山についての記述は、〔飯沢 1992〕、〔佐々木 2006〕、〔森山 1993〕に負っている。
- 5) この部分の記述は、〔岡塚 2006〕に拠っている。
- 6) 当時、日本で普及していたのは、イギリスで発明された湿板写真術だった。撮影の直前にガラス版に感光乳剤を塗布し、湿っているうちに撮影、すぐに現像するものだった。乾板は、1871年に発明された技法で、ガラス版にあらかじめ感光乳剤が塗られていた。長時間の貯蔵が可能であり、撮影後にすぐ現像する必要がなかった。また、湿板よりも感度が高く、露光時間も短かった。
- 7) 工藤に関する記述は、〔中田2006〕に拠っている。
- 8) 小川についての記述については、〔島村 1980〕及び〔川瀬 2006b〕を参照した。
- 9) Panoramioに対する個人の写真投稿については、完全に自由ではないことに留意する必要がある。掲載に際して、運営側が認証を行っており、投稿から認証まで1ヶ月以上の時間がかかる場合もある。ただし、個人が閲覧するMy Pageには、自分が投稿した写真を全て掲載することが可能である。
- 10) Panoramioから投稿された写真をGoogleマップで閲覧するには、「写真表示」の指示を行う必要があり、写真と地図との組み合わせが最初から表示されているわけではない。

引用文献

- 浅田隆・和田博文（編） 2000 『古代の幻——日本近代文学の〈奈良〉』世界思想社
- 飯沢耕太郎 1992 『日本写真史を歩く』新潮社
- 乾由紀子 2008 『イギリス炭鉱写真絵はがき』京都大学学術出版会
- 遠藤英樹 2001 「観光という『イメージの織物』——奈良を事例とした考察」『社会学評論』第52号（1）、133-146頁
- 遠藤英樹 2006 「『テキストとしての社会』が交差する空間」『奈良県立大学研究季報』第16巻3・4号、48-50頁
- 岡塚章子 2006 「小川一眞の近畿宝物調査写真——日本美術への視点をつくった写真」『月刊文化財』25-28頁
- 小川伸彦 「表象される奈良—B面の『なら学』のために」『奈良女子大学文学部研究教育年報』第3号、27-37頁
- 株式会社日本アート・センター（編） 2006 『小学館アーカイブス ベスト・ライブラリー 27 名作写真館』小学館
- 小川光三 古寺と仏像 尊像に秘められた祈り』小学館
- 川瀬由照 2006a 「写真と文化財——その目的・概要」『月刊文化財』第517号、4-6頁
- 川瀬由照 2006b 「仏像写真家と文化財（彫刻）写真」『月刊文化財』第517号、29-32頁
- 佐々木利和 2006 「壬申検査と写真」『月刊文化財』第517号、21-24頁
- 島村利正 1980 『奈良飛鳥園』新潮社
- 中田善明 2006 『国宝を撮した男 明治の写真師 工藤利三郎』向陽書房
- 西村清和 1997 『視線の物語・写真の哲学』講談社
- バジャック、クエンティン 2003 『写真の歴史』（遠藤ゆかり訳、伊藤俊二監修）創元社
- ベンヤミン、ヴォルター 1991 『複製技術社会の芸術』（佐々木基一編）晶文社
- 三木理史 2007 『世界を見せた明治の写真帖』ナカニシヤ出版
- 森山朋美 1993 「横山松三郎 探求するまなざし」『BT：美術手帖』第665号、56-59頁

Pinney, Christopher 1997 *Camera Indica: The Social Life of Indian Photographs*, Reaktion Books.